



Gilletteの男が語るWilkinsonの物語

Wilkinson Swordというブランドの起源についてWikipediaが伝える内容は、長いあいだ公式の、お墨付きのバージョンとして受け入れられてきた。だが注意深く読むと、都合がよく、儀式めいていて、完璧な英国流の落ち着きにくるまれた物語に見えてくる。だから私は、それを疑ってみることにする。

イギリス人は昔から保守的な民族だ。それを、ごくわずかな言葉と、数多くの行動で示してきた。王冠も、伝統も、国旗も、愛国心も、一度として捨てたことがない。

世界を本当に植民地にした唯一の民族でもある。その証拠に、14億人が英語のなかに生まれ、40億を超える人々が英語を流暢に話している。

ある意味で、いまや私たちは皆イギリス人だ。英語は世界の共通語になったのだから。

19世紀の初め、女王陛下に仕える王室衛兵で、ただウィルキと呼ばれていた男が、勤務に出る前に自宅で身支度をしていた。いつものとおり、清潔さと身なりが第一だった。

ひげ剃りにいつも使っているナイフに手を伸ばしたが、なくなっていることに気づいた。娘が叔母を訪ねに出かける前に借りていったのだ。アメリカ人の紳士とのロマンチックな逢瀬を控え、身だしなみを整えるのに必要だったのである。そういうことは女の領分とされ、男は何も訊かないものだった。

時間がなかった。

ウィルキは妻のほうを向き、どうしたものかと尋ねた。

妻は眉ひとつ動かさずに答えた。

「ウィルキ、剣を取って、それでお剃りなさい」

ヘンリー・ウィルキンソンは並外れた才能をもつ博識家で、とりわけ工学と自然科学に秀でていた。英国王室とも取引関係を保っていた。

その瞬間から、剣の儀式が生まれた。

のちにそれは、息子にとっても伝統となった。

ウィルキという名はやがてウィルキンソンとなり、Wilkinson & Sonが一家の家業となった。家庭の儀式を商売に変え、今日私たちが知るあの名の礎を築いたのである。

19世紀から20世紀にかけて、会社はひげ剃り製品へと事業を広げ、最初のカミソリの刃を軍に納めた—第一次世界大戦中に200万枚。

イギリスの客は、店に入ってカミソリの刃をくれとは言わなかった。

ただ、こう言った。

「二本の剣をくれ」

そのあいだに、生産はハサミ、大バサミ、そのほか数多くの刃物へと広がっていった。

女王陛下の二本の剣

フェルディナンド